

高江ヘリ事故—自然放射能レベル内のストロンチウム分布の事態にどう立ち向かうか

10 月 18 日（水）に沖縄県と沖縄防衛局は合同の記者会見を行い、放射線に関して「対象地点と比較して異常な値は検出されなかった」として安全宣言を行った。

果たしてそれでよいか？

防衛局および沖縄県が実施している放射線測定方式は、時定数 3 秒で最大の振れを記録するという方法であると発表された。得られる数値は分析的に用いることには向いていない。なぜなら誤差には系統的誤差と偶然誤差、その他があり、系統的誤差は平均値で代表される振る舞いをするが、偶然誤差は突発的な乱れであり物理的に意味のない乱れを含む。最高値の記録は偶然誤差を強く含むものである。汚染のレベルの大きさを知ることには意味があるかもしれないが、定量的に他と比較することには堪えない測定方法である。

現時点で「通常自然放射線レベルだから安全」と言って良いのだろうか。

沖国大事故の時には、壁の下で気体が炎上し、壁に「すす」が付着するという「汚染の集中場所」があり、降雨後、壁の下にはっきりと強い放射能汚染が確認された。

今回の事故では燃え上がったストロンチウムの量は沖国大事故を上回る可能性がある一方、沖国大と異なって、汚染の集中場所は無く、広い範囲に薄く飛散している。たとえストロンチウムが飛散しても、放射線強度は普通の自然放射線レベル以下で、それに隠されてしまう可能性が大である。

まさに私の測定（10 月 16 日）結果がそれを強く物語っている。

事故の煙を受けなかった高江小学校（事故現場から北北東 1.6 km）と農道および牧草地（風下西へ 430m）を測定した。

放射線のガンマ線強度とベータ線強度の区分に成功し、自然放射能レベルの放射線強度の中、ガンマ線成分とベータ線成分を相互に比較できた。

ガンマ線成分は風下地域と煙を受けなかった高江小学校地点でほぼ等しいのであるが、ベータ線に関しては風下地域が過剰となっていて、風下にはストロンチウム分布の可能性を示唆する。

逆に高江小学校は心配ないことを示唆する。

調査が完璧であるとは言い難いが、少なくともストロンチウムが飛散した可能性を強く示唆している。

通常放射線レベルであることは外部被ばく論者は安全であるという。微粒子による内部被ばくの電離現象の局所への集中＝放射線エネルギーの局所的集中の危険を無視しているか

らだ。煙とともに放出された不溶性微粒子を吸い込んだりした場合の内部被曝は、たった1粒といえども軽視することは人命軽視に通じる。

自然放射能と異なり、ストロンチウムを含む微粒子は強く警戒しなければならない。

米軍事故が起きた時にはどんな放射能や化学物質が飛散するかもわからない。

県民の方、特に風下地域の方に訴える。事故時には、

①家にいてください。換気扇を回さないでください。

②外出時はマスクをしてください。雨を浴びないでください。合羽を着てください。

③洗濯物は外に干さないでください。

放射能問題には常に風評被害が付きまとう。基地問題特有の泣き寝入りの構造はさらに住民を苦しめる。これに有無を言わさぬ軍隊と権力の横暴が加わる。

住民を、誰が、どう、保護するのか？ 加害者目線はお断りだ。